（C）日刊スポーツ新聞社

ニッカン 世界トライアスロン シリーズ 横浜大会

ニナー賢治 日本勢最高11位

◇5月13日◇横浜・山下公園周辺特設コース◇エリート男女（スイム1・5キロ、バイク40キロ、ラン10キロ）パラ男女（スイム0・75キロ、バイク20キロ、ラン5キロ）

日本男子の新エース、ニナー賢治（30＝NTT東日本・NTT西日本）が、エリート男子で日本勢最高の11位に入った。スイムを4位で上がったニナーはバイク、ランともに上位をキープ。終盤遅れたものの、トップと55秒差の1時間43分8秒でゴールし、来年のパリ五輪に向けて手ごたえを口にした。エリート女子は佐藤優香（31＝トーシンパートナーズ・NTT東日本・NTT西日本、チームケンズ）が日本女子最高の29位だった。パラ男子ではPTWC（車いす）の木村潤平（38）が世界シリーズ初優勝。東京パラリンピックPTS4で銀メダルの宇田秀生（36）が4位に入った。なお、今大会ではこどもスポーツ記者を一般から募集、選ばれた子どもたちが大会の感想を寄せた。

【2～4面に掲載】

力走するニナー賢治

来年パリオリンピックへ手ごたえ「100％頑張れた」

スイムは4位

沿道に戻ってきたファンを、ニナーが沸かせた。スイムを4位であがると、バイクではトップ集団の前方に食らいついた。ランでも沿道の歓声を受けて入賞圏内をキープ。14年に田山寛豪が記録した大会の日本男子最高位8位更新も見えていた。

終盤抜かれて11位まで順位を落としたものの、力を振り絞ってゴール。そのまま倒れこんで車いすで運ばれたが、元気を取り戻して記者の前に現れると「100％、頑張れました」と胸を張った。「狙っていたのは、10位以内。もう少しでしたね」と悔しがったが、その表情には満足そうな笑みもこぼれた。

自信を持って臨んだレースだった。4月にはスペインで標高2300㍍の高地合宿。練習から好タイムを出すなど、状態は良かった。世界のトップがそろうレース前には「自分の今のポジションを知りたい」と話していたが「十分戦える」ことも分かった。

豪パース育ち

オーストラリア人の父と日本人の母の間に生まれ、オーストラリア・パースで育った。日本トライアスロン連合（JTU）の誘いで、18年からは日本の強化指定選手としてレースに出場。21年に日本国籍を取得し「日本代表で五輪出場」の夢をかなえた。

東京五輪の14位で変わった。「強くなって、メダルを」。トレーニングを見直し、普段の生活から改めた。JTUパリ五輪対策チームの山根英紀リーダーは「繊細な日本人のトレーニング法や調整法を取り入れ、強くなった」と目を細めた。

強いメンタル

直前にパスタを食べ過ぎ、レース中に腹痛で嘔吐もしたが「食べ過ぎました」と笑い飛ばす精神的な強さも武器。性格も前向きだ。「2位、3位は遠くない。自信あります」。まだ不慣れな日本語で、パリ五輪表彰台への意気込みを口にした。

日本勢最高位も涙 女子佐藤優香29位「悔しい」

佐藤優香

エリート女子の佐藤は日本勢最高位でゴールしながら29位の結果に「ランの課題が残った。スタミナが足りなかった」と肩を落とした。スイム15位で、バイクも8位集団で粘った。しかし、苦手のランで順位を下げ、アジア大会代表条件の16位以内に届かなかった。レース展開は良かっただけに「悔しい」と涙を流した。

結果こそついてこなかったが、この日までの調整には納得の笑顔も見せた。18歳でユース五輪金メダル、16年リオデジャネイロ五輪で15位に入り、4年後のメダルも期待された。しかし、体調を崩して極度のスランプに陥り、東京五輪は出場もかなわず。それでも「今回、久しぶりに100％満足してレースを迎えられた」と話した。

1カ月前「何かを変えないと」と始めたのが、毎朝20分のランニング。目的は強化ではなく、ルーティンを持つことだった。心身ともに回復の兆しが見える中でこの日を迎えた。復調のきっかけをつかみ「改善すべきところはあるが、目指すもの（五輪）は変わらない」と、前向きに話していた。

北條巧スタミナ課題

北條巧

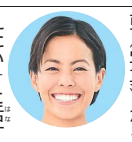
○…青髪の北條巧は、エリート男子で19位。大集団となったバイクまでは上位を狙える位置で粘ったものの、ランで大きく遅れ「足が重かった。（バイクまでは）12位以内も狙えると思ったけれど、実力不足でした」と話した。パリ五輪の表彰台を目指して、今季からウエートトレーニングにも時間を割き、体幹を強化。「スイムのキレをよくすることと、ランのスタミナをつけること」と、課題をあげていた。

高橋侑子「いい経験」

○…東京五輪女子代表の高橋侑子は39位に終わり「うまくいかない。力が足りなかった」と肩を落とした。「体が思うように動かなくて、不安があった」というスイムで大きく出遅れ、その後も後方でレースを続けた。プールではいい泳ぎができるが、選手同士が体をぶつけ合う水中での「バトル」克服がカギ。「このレースが、いい経験だったと言えるようにしたい」と目標とするパリ五輪に向けて巻き返しを誓っていた。

高橋侑子

上田藍が盛り上げ役



○…3大会連続で五輪に出場し、横浜大会では表彰台に2回立った上田藍（写真）が「ハマトラアンバサダー」として大会を盛り上げた。「大好きな横浜から、トライアスロンの魅力を伝えたい」と話す通り、テレビ中継での分かりやすい解説や、トークショーなどで大会をPR。五輪レースから退き、デュアスロン（ラン・バイク・ラン）やロングディスタンスで世界に挑戦中だが、横浜は「特別な大会」のようだった。

パラ男子PTWC 木村潤平シリーズ初優勝

10回目の挑戦で悲願達成！「応援が背中押してくれた」

ガッツポーズする木村潤平

男子PTWC（車いす）で世界シリーズ初優勝を果たした木村は「やっと勝てた。めちゃくちゃうれしい」と喜びを爆発させた。得意のスイムを2位であがると、バイクで先頭に立った。ランでも粘って、トップでゴール。仲間たちからの祝福を受けて「狙い通りのレースができた」と満面の笑みで話した。

横浜大会には13年から出場を続けてきた。2位や3位には入るものの、あと1歩で優勝を逃し続け、10回目の挑戦となる今回は「どうしても、ここは優勝したかった」。新型コロナ禍による制限が解除され、沿道に戻ったファンの声援を浴びて「応援が背中を押してくれた」と感謝した。

競技を続けながら、現在はスポーツの普及活動にも力を入れている。「どちらも大切。競技か仕事かというよりも、しっかりと両立させていきたい」。競技での活躍は、普及活動にもつながる。だからこそ、どちらも中途半端にできないという覚悟がある。

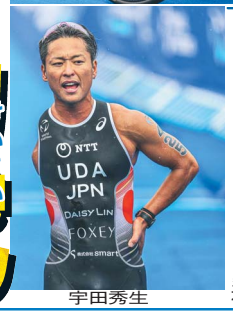
パラリンピックは、小学生の時から取り組む競泳で04年アテネ大会から3大会連続出場。16年リオデジャネイロ大会から採用されたトライアスロンでは2大会連続大舞台を踏んでいる。来年出場を果たせば6大会連続。「ゴールはパリですが、その前に1つ1つ結果を残せるように頑張りたい」と話していた。

手応えの5位 秦由加子

秦由加子

○…女子PTS2で5位だった秦は「久しぶりのレースで、すごく楽しかった」と笑顔で振り返った。東京パラ大会直後に右脚を手術。長年悩まされてきた右足の痛みを軽減するため、大腿骨を3㌢短くしたのだ。1年以上レースから離れ、この日が復帰2戦目。7月から始まるパリ大会の選考レースに間に合わせて「手術して良かったかどうか、この1年がすごく大事になる」と話した。

表彰台あと1歩 宇田秀生


宇田秀生

○…表彰台が期待された男子PTS4の宇田は4位。「少しずつレベルアップしているとは思うけれど、まだ及ばなかった」と悔しそうに話した。課題だったスイムは「合宿の成果が出て、いい泳ぎができた」と振り返ったが「バイクとランで上げきれなかった」。それでも、パリ大会に向けて、まずは「パリのプレ大会とスペインの世界選手権では表彰台を狙いたい」と意欲をみせていた。

めくってね!! 10人のキッズ記者が取材した記事&写真を掲載

〈主催〉横浜市、日本トライアスロン連合、横浜市スポーツ協会、日刊スポーツ新聞社〈メインパートナー〉ENEOS、NTT東日本

【写真撮影】©Shugo TAKEMI／Triathlon Japan Media